

「もちかえり」の効果に着目したイベント型まちづくりに関する研究

EVENT PLANNING AND MANAGEMENT FOR REGIONAL VITALIZATION WITH VIEW OF MOCHIKAERI BE IN CONJUNCTION WITH CITIZENS'S PERCEPTION, DESIRES AND MENTAL IMAGE, - ENVIRONMENTAL DIRECT / INDIRECT REPERCUSSIONS ON SET OF PRODUCT-BASED, SPACIAL AND PERSONAL DIMENSIONS

○ 近藤 隆二郎* 盛岡 通**

By Ryujiro KONDO, Tohru MORIOKA

This paper clarifies event management is an efficient method in regional planning, community management and semantic environmental designing that have been requested to bring cooperative actions and to grow partnership among citizens, government and business sections.

From the results by analysing of temporal alteration of the event management, one perspective we call "MOCHIKAERI," which accounted much of environmental direct/indirect repercussions of event rather than monetary outcome, is found to have potentials of contribution to city planning. Four major types of "MOCHIKAERI" are identified from varieties of cause-effect relations in event's real circumstances. Those are, 1) societal seeds incentive to new activities and to organizing new networks, for instance, symposium and festival, 2) assembling to incubate proposals and ideas from participants, for instance, competition and workshop, 3) introducing impressions and evaluations about ideas of plans for instance test, experiment and seminar and 4) joining in activities to propaganda and informate for instance memorial ceremony and inspection.

Repercussions of "MOCHIKAERI" are characterized by three dimensions of the product-based, spacial and personal, which identify the diversity of the suitable of event management. Finally the analysis of the two modern events, "SETAGAYA RELAY EVENTS" and "SURF'90" from the view of "MOCHIKAERI" provides two suggestions to manage plural events effectively, which are the unification-oriented type of "MOCHIKAERI" which make participants sympathize with orientation of those events and the systematization-oriented types of "MOCHIKAERI" that combine hierarchically those events with each other.

1. 研究の背景・問題提起

「イベントブームは去った」という表層的理解とは別に、出来事＝「こと」としてのイベントを活用することは、市民参加から市民主導型へ移りつつある現在のまちづくり、地域づくりにおけるひとつの有効な手法になることはまちがいない。地域整備においての実態面でも、効果的でかつ市民にも開かれたものとして受け取られるという図式を持ち得る。

本研究は、このようなイベントを取り込んだまちづくり（イベント型まちづくり）の位置づけを明確にするという目的を持つ。そのために狭義のイベント時空間そのものではなく、「もちかえり」に注目し、まちづくりのプロセスとする流れの中で捉え直し、あわせてイベントにおけるコンセプトとその効果とのつながりを明確にすることを試みる。

2. 本研究におけるイベントの捉え方

(1) 本研究におけるイベント

「イベント」＝「こと」には、「起こすこと」と「起きること」という面を考えることができる。「起こすこと」としては「祭り」や「祭礼」にその源流をみることができ、「起きること」としてイベントを契機にしてまちづくりが進んだ事例としては、イベント＝災害を契機として進展する防災事業をあげることができる。本研究においては、操作的、計画論的な視点から、「起こすこと」としてのイベントを取り上げる。特に、地方自治体の地方博や市民団体の市民まつりなどをその検討の中心におく。

(2) イベントを捉える視点の流れ

明治時代に始まる博覧会（内国勲業博覧会）や伝統的な「祭り」や「祭礼」に現在のイベントの萌芽を見ることはできるが、「イベント」という言葉が頻繁に使われ始めたのは、1980年代からである。80年代の地方博ブームから現在までの、イベントを捉える視点の変化を概略として追う。

キーワード：イベント運営、環境計画、市民参加、波及効果
* 学生会員 大阪大学大学院 工学部環境工学科
** 正会員 大阪大学助教授 工学部環境工学科
(〒565 大阪府吹田市山田丘2-1)

a) 事例報告の視点

近年のイベントに関する考察は、『神戸博ポートピア'81』といった地方博覧会を対象に展開されてきた。当初は、各地のイベント実践例といった地域整備の報告例としての捉え方が中心であった。また、むらおこしといったレベルでの成功事例は、固有の人材要素に基づく結果という解釈で、イベント自体が一般性を持つ手法・手段かどうかは検討されず、ハウツーものの出現は別にして方法論的な研究はあまりなされなかった。

b) 目的明確化の視点

成功事例とともに失敗例も出来てきたことから、事例報告の次には「何のためにイベントをやるのか」というイベント活用の目的を明確にする視点が行政を中心に展開されることになった。多くは「地域の活性化」という言葉を用い、内容として「観光地づくり」「まちづくり」「文化行政」「都市づくり」「コミュニティづくり」という枠の中でイベントを捉え、それぞれの効果を実例を引用して述べている。この中に、まちづくりでは、①需要創出、②エネルギー触発、③不満・情念の発散、④地域の革新という点¹⁾、文化行政では「文化的な価値・財の流通機能を担うもの」という点²⁾、コミュニティづくりでは「結晶型合意形成のため」³⁾といったイベントの効果の整理を見ることができ、イベントの可能性も示している。

c) イベント分類の視点

イベント事例を分類する試みもなされた⁴⁾。その多くは、前述の目的を分類項目の下地にしている。

d) 都市サービスへの取り込みの視点

目的からイベントを捉え、分類した次の展開としては、イベントを内蔵したコンベンション都市、フェスティバル都市というような新しい都市サービスのあり方の提案がなされた⁵⁾。単発ではなく、ひとつの都市の要素としてイベントを捉え、その複数の集積によるストックとしての都市の姿を描いている。

e) イベントの担い手に関する視点

サービスの視点と同時に、イベントを行う主体に関する研究も見ることができる。イベントは行政の場合には各課からの仮出張で対応される場合が多い。しかし、ソフト化という情報に敏感に対応する必要上、その体制の限界が明らかにされた。実施主体としての組織のあり方を述べたものや、人材の発掘を求めるものを見ることができる⁶⁾。これより伺えることは、「コンセプト」を自由に設定する体制をい

かにつくるかという問題点である。

f) コンセプトへの視点

同規模による比較などを通して、イベントそのものの内容(コンセプト)に視点が入り込むことになった。「コンセプト」の決定要因については、時代性や話題性等の要素が挙げられるが、最終的な結論としては、地域の個性を活かすという点で一致している。対象地域をどのように「物語るか」という、コンセプトの伝達方法について述べられているのは興味深い⁷⁾。コンセプトの抽出あるいは展開について一般的な流れは、「〈掘り起こし〉→〈生かし〉→〈つくる〉」という段階をみることができる⁸⁾。

g) 手法としての地域整備への視点

イベントを含む全体の流れ(計画-実施-結果)のマニュアル化は、建設省の『地域整備としてのイベント』に見い出すことができる⁹⁾。「地域整備」あるいはインフラ整備の視点から、細かいところまで標準パターンを設定し、マニュアル化を試みている。

h) 分節化する視点

地域整備としてのイベント論がひとまず確立された時点で、イベントに関する研究は、イベントブームの終えんと同時に再び各事例へあるいは小さな視点へ、さらには概念の再構築へと分散していった。「祭り」からイベントを再構築するものや¹⁰⁾、記号論的な立場から都市の中での位置づけを与えるもの¹¹⁾はイベントの原点としての視点を明確にする。また、博覧会についても、原点としての「勧業博」からの流れを追うものは地方博への問いかけの視点を持っている¹²⁾。これらコンセプトや記号論といった意味論的な捉え方の一方で、デザイン的な視点からイベントを手法化しようとする試みを見ることもできる¹³⁾。このように近年のイベント論は「小さなイベントの時代」の流れと同調して、とらえ直し、身近に再構築するといった方向に向かっているといえよう。

3. イベントの解説と視点の提起

簡単にイベントを捉える視点の流れを追ったが、それらを整理する意味も含め、「イベント」事象を解説することによって、基本的な視点を提起したい。

(1) イベントの解説

イベントの解説に際して、文化人類学における儀礼を捉える視座を取り入れる。ある意味で非日常空間を形成するイベントも儀礼の一種として捉えることができる。リーチによって提唱された儀礼におけ

る局面は、図1のようであり「境界の儀礼」とされている¹⁴⁾。

しかし、儀礼が象徴的な機能であるために、その前後での日常生活が実質的には変わらないとする捉え方に対し

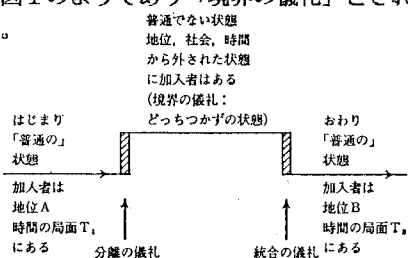
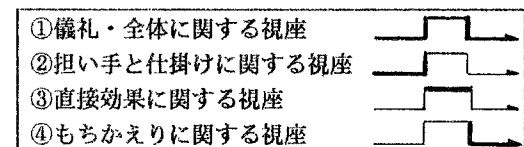


図1 リーチによる儀礼の局面

て、イベントでは、その前後で物理的にも精神的にも変化する可能性を考えることができる。つまり図2のように、イベント前、イベント、イベント後と3段階の時間の流れを見ることができる。この境界時間としてのイベントから、大きく次の4つの視座を挙げることができる。

図2 イベントの3局面



(2) 4つの視座

「①儀礼・全体に関する視座」は、イベントをひとつの全体として扱うもので「都市におけるイベントの意味は？」といった視点を持つ。これは、民俗学や文化人類学における「祭り論」や記号論的な視点に見ることができる。また「②担い手と仕掛けに関する視座」は、いかに開催にまでこぎ着けるかというイベントの開催前に関する論点である。縦割り型からネットワーク型へといった組織論などにみることができる。「③直接効果に関する視座」は、イベント時空間の直接的な効果や構成に関する視点であり、コンセプト論やイベント空間論・演出論そして経済的な観光収入といったものがある。「④もちかえりに関する視座」は、間接効果や波及効果と呼ばれるものを含み、イベント後にどのような影響・効果が残ったかという捉え方である。

本論は、まちづくりへの手法化の点からイベントを捉えるために、主に「④もちかえり」という「後の祭り」に何を残すかという点に絞って考察する。

4. 「もちかえり」の類型抽出

(1) もちかえりについて

とは、図3のようにイベントをひとつの外的プロセスとして、それ

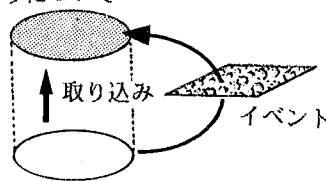


図3 「もちかえり」の概念

を内部に取り込む過程として定義できる。イベントをひとつの手段・手法として捉えるもので、イベントの結果を述べる論よりは、ある目的のもとに手法・手段としてイベントを捉えている論中にみる方がより具体的な示唆を得ることが多い¹⁵⁾。

(2) もちかえりの類型化

ここで「もちかえり」の目的に注目し、「もちかえり」の類型化を考察する。どのような場合に手段として用いるか、あるいは参加するかを考えると、イベントという多主体の交流に際して、その交わりを活用して情報を伝達する、あるいは交わりから何かを生み出そうとするといった情報発信の軸が考えられる。もうひとつは、イベント中のコミュニケーションとして、プランの持つ方向性に対する参加者の反応を重視する two-way型と、プランの紹介や人々からの立ち上がりといった one-way型としての軸を考えることができる。この2軸より、以下の4つをもちかえりの類型として提案できる（図4）。

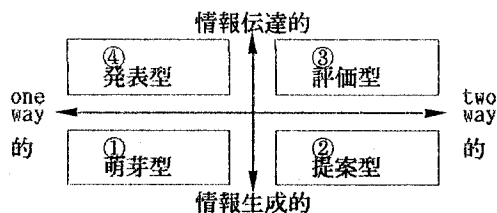


図4 「もちかえり」の4類型

①「萌芽型もちかえり」(図5)

イベントで人・もの・場が交わることから新しいもの（情報）を生み出そうとするものである。まちづくりへの住民参加の基礎をつくるものとして、イベントに市民参加を取り込んでいる例や、むらおこしでの交流づくり



図5 萌芽型の概念

は、この効果を狙ったものと言える。外国人との交流によって、市民レベルでの国際交流が進んだとい

った例はこの一つである。

②「提案型もちかえり」(図6)

コンペティションやシンポジウムといった形態が典型的で、あるベクトル(課題)を持つ枠の中で自由なアイデアを引き出す(情報を発信する)というもちかえりである。課題に対して様々な発想が生まれることが期待される。提案することによる関心の引き上げという効果もある。

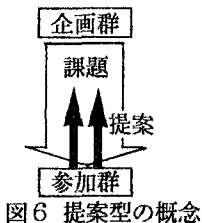


図6 提案型の概念

③「評価型もちかえり」(図7)

イベントにおいて複数の人・もの・場が交わるため、その交わりに情報を伝達することによって、それに対する評価を集積し、情報源へのfeedbackを期するものである。商品開発では多用している。地域整備においては「社会を改善するためには新しい制度やシステムについて、

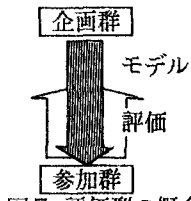


図7 評価型の概念

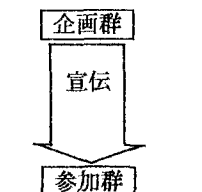


図8 発表型の概念

実際の現場で適用してみるなどの試行錯誤を繰り返し、その上で漸次的に改善していくという社会改善

表1 「もちかえり」のパターンごとの実施条件と留意点

パターン	実施する理由(条件)	実施上の留意点(イベントへの提言)
①: 萌芽型もちかえり	行き詰まり、ネットワークづくり、活動立ち上げ	柔軟性、次につながるシステム、自由な発想、場の準備、ある程度の誘導必要
②: 提案型もちかえり	アイデア欲求、関心拡大、意見収集、広範囲な意見	広報重要、提案形式の簡略化・安易化、収集結果の公聴会
③: 評価型もちかえり	効果不明確、予測不可能、プラン特殊、広範囲な意見	評価システム必要、コンセプト明示、受け入れ体制の構築
④: 発表型もちかえり	まとまり、計画重視、推進アクセル、PR、広報宣伝	プランの関係明確化、方向の明確化、楽しさ、情報の提示方法、まじめさ

表2 もちかえりの類型ごとのイベントの形態と3つの次元

※企画主体ならば、人材育成やノウハウの蓄積がある

類型	イベントの一般的な形態 (重視する項目で類型化)	次元		
		個人(参加)	人・もの・場(参加)	もの・場
萌芽型	市民まつり、シンポジウム、バザー、フェア、オリエンテーション	不満の発散、交流	つながりをみつける、交流	市場の拡大、ネットワークづくり
提案型	シンポジウム、討論会、ワークショップ、コンペティション、コンクール、勉強会	ネットワークづくり、仲間づくり、行動誘発	ネットワークづくり、仲間づくり、行動、啓発	アイデア欲求、関心アップ、新事業展開、意見交換
評価型	講演会、社会実験、セミナー、祭り、アンケート、ヒアリング、見学会、講座	批評、知識、学習、啓発	活動刺激、活性化	マーケティングニーズの把握、効果把握
発表型	博覧会、記念まつり、観水祭り、説明会、展示会、バザー、見学会、スタンプラリー	不満の発散、楽しさ、理解促進	仲間拡大、活動PR、楽しさ	販売促進、動向確認、意見ヒアリング

への実践的アプローチ¹⁶⁾と定義される「社会実験」という手法もそのひとつであり、イベントで試すことによって評価を得る手法ということができる。

④「発表型もちかえり」(図8)

閉鎖的になりがちなプランをイベントという交流の中で共有することによって、関心や理解を進めると同時に、計画を円滑に進めようとする姿勢をもつ。地域整備でも、イベントを行うことによって、投資を集中し、効果的な事業展開を図ることがある。地域整備が立ち遅れている場所にイベントを行うことで国からの助成を呼び込み、整備を促進することも一例である。

以上、4つの「もちかえり」について説明したが、それぞれの開催主体からみた実施条件及びその留意点を表1にまとめた。

5. 「もちかえり」からみた現在のイベント

(1) 人・もの・場からのもちかえり

イベントは一般的に、人・もの・場の交わる機会として捉えることができ、各要素をイベントを構成する次元として捉えることができる。各次元からもちかえりを捉えると、表2のようにイベントの形態と期待される効果が関連する。もちかえりから見て、イベントをどのように活用するかをそれぞれの次元ごとに捉える。

①「ひと」と

個人と集団に分けることができるが、企画者(集団)であれば、その体験によって人材育成・ノウハウの蓄積を得ることができる。イベントへの参加者という立場に立つと、啓発・学習という効果が主になるが、公聴会・発表会という聞く態度(発表型)から意見を反映させ(評価型)アイデアを託す(提案型)、そして何かをやるとうする姿勢(萌芽型)へと積極性が高くなる。提案型では、意見という従来のかたちではなく、コンクールやコンペあるいは絵本づくりといった「もの」をOUTPUTとして提案するかたちが盛んである。萌芽型は人的資源が左右するので、何かを成し遂げながら情報を発信するというかたちが主流になりつつある。

②「もの」と

製品としての流通段階と対応して、萌

芽型(企画)→提案型(開発)→評価型(試験)→発表型(宣伝)という流れを持つ。イベントでサンプルを配布・体験させることによって、それに対する評価をニーズとして把握するもちかえり(消費者マーケティング)は広く行われている。新製品・新商品の開発としては、コンテストやファッションショーといった提案型の形態で行われるのが一般的である。発表型はイベントを通して販売を促進するという効果をもつ。

③「場」

大阪万博で新御堂筋や北大阪急行、千里ニュータウンが集中整備されたように、関連するインフラ整備が主要である。もうひとつの重要な点であるイメージアップでは、評価型としての社会実験に見られるように、歩行者天国の実施により新しい道路の使用方法を開発したり、アートスเคープ(ARTSCAPE)として空間をインスタレーションで演出することによって、人々の評価・関心を高めることができる¹⁷⁾。まちづくりは、ハードの整備だけではなく、このようにソフトを組み合わせる方向へ移りつつある。

(2) 「もちかえり」から見た「まち体験行動」

ここで、人・(もの)・場の次元を結び付けるひとつの形態として「まち体験行動」を取り上げる。「まち体験行動」とは「まち」をイベント空間として行われているもので、人と場の重層する結び付きを見ることができる。参加動機から「みる」「きそう」「あるく」という視点でも分類できるが¹⁸⁾、「もちかえり」というイベントをどのような分脈の中で活かすのかという視点に立つと、表3のようにその類型ごとにまとめられる。

表3 「もちかえり」のパターンからみたまち体験行動の形態

類	人における効果	場における効果	内容の演出視点	イベントの事例	代表事例
萌芽型	楽しむ まちへの愛着形成 人と知り合う	場の提供 場のPR	自由な雰囲気 楽しさを演出 交流を演出	御興(まつり) ウォークラリー 初エテリング	『杉並「知る区」ロード』 ¹⁹⁾
提案型	まちを発見する 自分へ問題を探す	まちの魅力誘引 まちの見方開発	発表の場必要 まとめる場必要 その後どうするか	ウォッチング 環境カルテ 「まち遊び」	『臺中おもしろ探偵団』 ²⁰⁾
評価型	まちの意味を理解 まちを知る学習する まちの意外な面認知	まちへの認識 まちへの評価	コンセプト明確化 評価感享受止め	パレード 「まちめぐり」 自然観察会	『九輪の台地』 ²¹⁾
発表型	楽しむ、知る	利用促進 広報宣伝	楽しさを演出 魅せる努力 分かりやすく説明	記念パレード 歩いてみよう 〇〇道歩き初め	『出雲街道 NOW IN 津山』 ²²⁾

これより、人と場のもちかえりの関係から図9のように類型を並べることができる。

このように、「まち体験行動」は「もちかえり」という視点から見ると、人の学習啓発としての効果と、まちの理解促進としての効果が関連していることがわかり、そこからまち歩きの形態を構想するこ

とが可能である。つまり、開催の目的・状態に合わせてイベントを演出することが可能である。

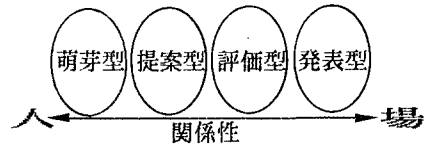


図9 まち体験行動における類型の関係

(3) 近年の事例からの考察

近年の事例について「もちかえり」から分析を試み、イベント型まちづくりへの視座を得たい。取り上げた事例は『まちづくりリレーイベント』と『SURF' 90』であり、どちらも次世代のイベントとして注目されている。筆者らは、イベントのひとつの形態として、コンセプト性を強く備える「まちめぐり」の視点を提起し実施しているが、別途報告している²³⁾。

a) 『まちづくりリレーイベント』

世田谷区が1988年から実施しているもので、年に複数のイベントが連続的に実施されている。『ここがわたしたちのまち』をテーマに12回のイベントが行われた1988年を取り上げる。各イベントについて、その形態と「もちかえり」の分析を行った(表4)。

人の次元では、萌芽型もちかえりを中心に行われている。つまり、「住民各層のゆるやかで多様な参加と役所の横割り組織の醸成をねらっている」²⁴⁾とあるように、住民主体のまちづくりへ移行するために、多様なイベントを投げかけて住民を刺激している。このイベントは、「ネットワーク型、ごむひも型」として題材やテーマは多様性に富んではいるが、もちかえりとしては「萌芽型」から生み出すという姿勢で統一されている。

b) 『SURF' 90』(Sagamiwan Urban Resort Festival in 1990)

相模湾沿岸の13市町村を舞台に1990年に開催された海の総合イベントであり、

『人と海との共生』を目指し、新しい方策・手法の開発をイベントを実験として用いた。イベント総数は、大小550であり、そのひとつひとつについて触れるわけには行かないが、細分化・体系化されたねらいに沿ってイベントが類型化されているため、「もちかえり」を非常に重視していると言える。こ

ここでは、体系の一部である「美しい渚を守る」というサブテーマの中の「海浜の景観を守り創るしくみづくり」に類型化されたイベントを取り上げてもちかえりから分析した²⁵⁾ (表5)。

③「もちかえり」を、「萌芽型」「提案型」「評価型」「発表型」に類型し、イベントの目的と効果を結び付ける糸口を提案した。

④人・もの・場の次元からもちかえりを分節化する

ことで、イベントの持つ可能性を示した。

⑤人と場の次元を結び付ける一例を「まち体験行動」の中で見ることができ、形態とのつながりを試みた。

⑥2つの先進的な事例を分析し、イベントを

手法として用いるには「もちかえりのパターンの純化」及び「もちかえりの統合化」が鍵となることを導いた。

⑦本論は、イベント型まちづくりを構築する入口を示したものである。より発展を得るには、課題として、提起した4つの視座それぞれの展開とともにその結び付きを捉えることが考えられる。

参考・引用文献

- 1) 大森画; イベント論事始. (地域開発8308, 1983), pp16-22
- 2) 北村倫夫; 都市の経済文化機能戦略とイベント. (都市問題研究471, 1990), pp60-69
- 3) 森戸哲; 地域にみる「イベント」の意味. (地域開発8308, 1983), pp10-15
- 4) 例えは、(財)地域活性化センター編; 「全国イベントだより」では
1. コミュニティ育成/2. 地域イメージ・観光宣伝/3. 伝統行事・祭事/4. スポーツ/5. 教育・文化振興/6. 科学技術・産業振興/7. 健康環境問題等意識向上・啓蒙/8. 国際交流 に分類している。
- 5) 梅沢忠雄; コンベンション都市戦略. (都市問題研究428, 1986), pp77-88
- 6) 大久保昌一; イベント行政の諸条件. (都市問題研究471, 1990), pp3-17
- 7) 大森画; 前掲書
- 8) 松谷英二; 地域イベントと地域振興. (都市問題研究428, 1986), p38
- 9) 松下義次; イベントを活用した地域整備の推進について. (道路, 1988-8) pp22-28
- 10) 森田三郎; 祭りの文化人類学. 世界思想社, 1990
- 11) 橋本研一郎; 都市とイベント. (新都市, 1987-1), pp98-107
- 12) 吉見俊哉; 博覧会の政治. (都市問題, 1988-11), pp39-54
- 13) 澤本昌典; イベントと都市デザイン. (鳴海邦碩他編; 都市デザインの手法, 学芸出版社), 1990, pp161-170
- 14) E. リーチ/青木保; 宮坂敬造訳; 文化とコミュニケーション. 紀ノ国屋, 1981, p160
- 15) 浦口龍二・大坂谷吉行; 住民参加による景観調査・計画の試み(都市計画138), 1985, pp95-100など
- 16) ドウタンクダイナックス; 都市河川の再生と市民参加の研究. 1984, p29
- 17) 今井祝雄; 都市のアートスクープ. プレーンセンター, 1990
- 18) 近藤隆二; 盛岡通; コンセプトの純化と展開からみた市民参加型のことおこしに関する研究. 第4回環境システム研究. VOL19, 1991.
- 19) 吉川仁・中村昌広; 「散歩」と「街歩き」による都市体験に着目した都市づくりに関する基礎的研究. 第24回日本都市計画学会学術研究論文集, 1989, pp499-504
- 20) 八尾哲史・盛岡通・城戸由能; 地図遊びとまち歩きを通したまち環境学習に関する研究. 第4回環境システム研究. VOL19, 1991.
- 21) 盛岡通・近藤隆二; まち巡りの体験誘発による環境づくり支援. 第3回環境システム研究. VOL18, 1990, pp38-43
- 22) 近藤隆二; 盛岡通・城戸由能・原田弘之; 大坂上町台地における水文化の発掘とその現代のことおこし. 土木史研究 No. 11, 1991, pp259-264
- 23) 二瓶長記編; イベントからのまちづくり, ぎょうせい, 1990, pp230-241
- 24) 近藤隆二; 盛岡通; 前掲論文
- 25) 延藤安弘; まちづくり読本. 晶文社, 1990, p. 227
- 26) (社)サーフ'90交流協会; SURF'90白書, 1991

表4 『88まちづくりリレーイベント』におけるイベントの名称・形態ともちかえり分析

NO	イベントの名称	イベントの形態	人(個人)			もの			場(世田谷)		
			芽	提	評	芽	提	評	芽	提	評
1	「街の色を考える」	Design competition	●	●		●	●		●	●	
2	「魅力ある住宅地」	Design seminar	▲	●					▲	●	
3	「こんなトイレをまちにつくろう」	Design competition	●	●	▲			▲	▲	▲	
4	「わたしたちの多摩川」	Open festival	●			●			▲		●
5	「大山道歩く」	Walking tours	●	▲					●	●	
6	「パークショップ」	Workshop	●	●					●		
7	「水と緑のハーモニー」	Walk and Picnic	●						●		
8	「新しい山の手vs新しい下町」	Symposium	●	▲					●		
9	「世田谷、ここがわたしたちのまち」	Forum and Exhibition	●	●					●		
10	「まちづくりコンクール」	Contests	●	●					▲		
11	「やさしいまちってなんだろう？」	Forum and Orienting	●	●	●					●	●
12	「世田谷演劇工房」	Theater Workshop	●								●

(●…関係深い ▲…関係あり)

表5 『SURF'90』におけるイベントの体系化の一例ともちかえり分析

通年型の海岸美化へのしくみづくり	芽	提	評	発
海岸ごみについて学び、美化の方法を考える ・「サーフ'90海岸美化シンポジウム」	●	▲		
海岸にごみを発生させない試み ・「ごみ持ち帰りPR実験」 ・「デザインバック持ち帰り意識調査」 ・「ゴミゼロクリーンキャンペーン」 ・「ゴミゼロ海辺運動」 ・「海岸美化パネル展」 ・「ステイオンタブ街による散乱防止啓発事業」 ・「サーフ'90エコエム」によるキャンペーン		▲	●	●
海岸清掃システムの試み ・「計画清掃実験」 ・「拠点4会場及び周辺海岸の毎日清掃」 ・「海岸美化モニター制度の実験」 ・「ゴミゼロ海辺運動」		▲	●	●
海岸美化と美しい海岸を体験し、意識を高める ・「ゴミゼロクリーンキャンペーン」 ・「ゴミゼロ海辺運動」 ・「海岸美化パネル展」 ・「拠点4会場及び周辺海岸の毎日清掃」			▲	●

(●…関係深い ▲…関係あり)

イベントの主旨にもあるように、実験としての「評価型」が中心である。つまり、細分化、階層化された課題のもとにイベントが位置づけられ、実施・評価を通して、提案を導き出している。「相模湾」への提案を構築することができた重要な因子のひとつとして、「もちかえり」を明確化かつ体系化して統合していたことが挙げられる。

6. まとめと課題

本研究のまとめと課題を箇条書に示す。

- ①儀礼の時間的な視点からイベントを捉える4つの視座を提示した。
- ②まちづくりのひとつの手法とするために「もちかえり」に着目し、この点からイベントを捉え直した。